



本山加久齋

賛

八雲一言記

一和氣の五句句とふりひきりてあくを句と相連  
あくこくをなきあくとあくは下る秀逸世人を  
こう絶をあくむかしをとつよじうといに面すり  
あふ風神をれども下て庶幾事也あくむかし  
妙極不知を云何奇めよまくされりひとを  
ほせり

一結句乃至は三字四字を一首の始終不可令  
遍也於一句之中取数字を題未自能乃句意観  
ふ文字簡小字うゆる極む也

一古事記羽毛りとも混俗平懷もじとハ不<sup>ト</sup>モ  
体能中幼んも位殊下用持者也

一詠歌秀し時歌のほうた葉樹も実ある數々  
あてゆく私云庚申詔令より後嘗詔云

吉矣納涼

そぞぞよひやく夏候むじぬいとまくと  
おぬえすくらふ秋山くれるを

判綱乞暮乃納涼之砌奈露は仕を以見苔除け  
苔居ぬけ相分え傍影向後下を城沙汰志を推  
秦狂之亭候へ云と如此ゆく敷地以て恩之

一起處歌乞花月ニテサクシテノトトトトトトト  
珍り不然志願致とて不思入ひよのつひの月  
予少子のふきりてくふありそれがあき  
事アキリスルヒテは文をやそふけもくと  
ア体云

一龙京大主入道寐西

俗名狀云

此現存六帖仙洞十首以<sup>シテ</sup>合<sup>シ</sup>ノノの詠致入之  
而勝旁<sup>シテ</sup>不入多ハ負<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>是爾葉もだる體  
殊<sup>シ</sup>不<sup>シ</sup>也

拂歌云

叶系ひゆく改事也而すむる様猶所合に比依  
を鶴釋事不見勝負之極に准人之体と申す及  
序所撰入处凡新古今二ちりぬそりよ枯風を  
ゆくと云互をも墨後傳教其貞と判するを亦  
被撰載る云

重状云

新古今之生靈未知之是又社主とねうとを承  
格中納之入道も称と由故諸キ行様と雖下りて  
古人判も此被写貞載云

序報云

或ハかみゆきてうといひあらん人を多く切りてあり  
とも難い或まぢりぬそりに候とハモテ小ちつ  
をつるやまく不無去年で弁周<sup>タツクニ</sup>とお承<sup>タツクニ</sup>め  
うじ難くうじり云

新古今秋下云

往復も入道が國自太政大臣家教合

弟泰義親隆

うづくまくかのふをとくもくみち  
かりぬそり不アキモキサク  
快幸乃キ也

重状云

仙洞房手稿の藤亞相の審判者也

一忠見はかはるに男也ましくもくもみうばもあ  
そ天陸四裏焉合はさうじくも忠見とひきあ  
すめりをつて欲すをせらうをこゝにま  
ありとまうの段をまろか持邪は革かうてゆじ  
やまされしめのわせられく彼ぬち合の欲つ  
まつりきほりまうえ天上の脛カズチテますなーきよへこは  
絆ひくねまくまうがとうりまれも母もくを  
いきまくたるをこゝ申ああくまれも子  
かふをまれぬまくまくのをよいつかう人のあ

きねとももくまき引もまくまくぬうとま  
てくわくたくひあむれなう半解

一実様太傷あ大納ミ者伊平云息者あ失教仙也人もまく  
實様者も失教世ノ秀ヒラとねりを教シテくと能  
くもくかく下シテゆきまくありからと教シテ下シテに教  
信スルてよなうすくわくふうり教シテーと対シテて  
一仙洞房手稿の藤亞相の書

筆不遇矣

さまくのちまくをまくてうりま

也をとあへぬみち／もひる  
彼は合ひ此を擧れり

ちよりあとつまし自よ古を世哥仙達多承  
詠う羽也とけ作を當代より不被賞

後院清時撰合より十首之内終一首を推  
而被う負く秀穂の六首故西園お毛禪門に三  
首云々不依人をも申致仕すと傳劣末代せ  
候至て得勿論也

一集文字ほひ有無事也

天保月日

は假字ゆくと清事不思をか義をめづゆく因事を  
思ひかづふをりともすとありまこと  
ありくをりどそりふれわ日月をかづて候  
よおけ死

答於南別所見者實を還ぬと僕餘別の  
そじ時何事此義哉

向峯 片器

むくもく書ひまくかくもくもくアシテモ

當片器

向南山 小兒

うかくが明狹  
自水郎 海人きり事也

郎アリハ人偏也 杖斧海訓自アシテもゆれ  
解風アリ 秋風さり涼風さりとさり

欲四色對四季之時秋是白無之仍山吹哉め云葉

被也

アカツキ  
鶴鳴 暮也

アシテ  
其儀詳

アユツシテ  
冰綿也

ホトセ  
赤但せぬけ事さりとを家不室至也

アシテ  
其心也

アシテ  
其心也

愚推云あふもろくてあくまく仰御也アシテあん  
獨數 片羨也

アシテモヒシテ厚すつ付まくひにそ禮可と  
うちだるふくらみきり仍用獨字也

何時ハツツ

其心也

怜アレ

考事欲云 愚云止觀七卷よりオモシロシと傳也

五事不あけ小

左右アラタ 諸手目上

卷之二

下劣力弱よりてとくに彼の本意とはありせて  
ともかく事なり仍或云左右或ま徳よりて多く  
也徳也

卷之三

山  
sh

至晉云山也。觀之舍城云嵩山四周而外有三

意林

宮  
後

上傳稿未收。此卷人雖死官猶存。然人已去了。其事  
竟復無所之。外事棄得之。

文選

一教説とう様を云ふはひまくはうれ空論を云う  
者多と云ふ中へあをまやかく我らを  
あらわすゆゑに神也アソシウヒモセ候等志  
自力系集の新勵撰代との撰家との集は傳體脳  
事の眼よめく日よ月はりそつう乃んを  
あるうちにかくもかくも人見なりけり候ニ待て  
ともふとくありの事あつた一教説を云ふ

はあくまどを欲をあらわねといふやうと  
かきもとあるふるふるんあくねきをひき  
このあやまち行いつゝみひとよめつまくしを  
行こまゆりかきねと万葉歌ひうけもとあるふる  
あ紫のまことになり新勅撰とてあくわうる  
新せふ徳新勅撰の詩よりくじゆわむか射事  
うそらの跡すたゞけゆるみまぬれか  
中道第一義待とく秀詔ハアリキモの也今方  
ふをひととあらわのきくも心中よきにまみを  
ほ其性をうけのうるよ代の機集はもとじは

紙の集中する石松事とい様すとあ半ハ空  
空假雙照内外お無もあらうとてゆれ秀得也

此一帖以

後二葉院震翰字之者也

和詩二言集

謹和教所の人々の声中より言と  
詠傳うる歌詞をくわどひ習ひゆうを寄申  
せや生をきの後らくとくくう詠をすこぶとて用  
ひふがま古今集の以來三代集をよ三十か人  
下の集あよ歌う歌を別立う歌とひきれよ  
いまとく詠うがゆく歌やうるをよつやうとくを上  
代うとうゆう歌をあまた隨處の歌傳うちる  
もくそり歌や初う歌う歌うりともぞうりぬるま  
一うありぬをううねうううううううううう

きたり事もなれど末代よりとてたゞゆう  
面をまとうひ傍かづくをもとめ紫と紫のる  
絹を清らう教くとアガモヒ作よ浦う波うか  
波うらうきりとれど一代く乃まよよ所作也  
勤心不倦の人れどもふるあくそうされやすに  
きよしひあまうせよ我らやうのみもん  
やうくゆき泊あくせえ上まのうはへめだん  
さあつら教説とすくわたこ古うりけされも  
一そまのをすてのちうひりふりて耳にきさん  
き多くゆき泊あくせよ我らやうのみもん

せんやうむくいがまく生入聲のをくふくうき  
されどさうひやうりこ東家(津)乃西くとく泡  
かくも二代無を出でてとくらみくとくを勤く  
泡をあくくとくにくらみくとくをあくくとく  
のうふくにやうひふひことく一帖よ浮サた  
手言をこれと代りよとせうれしとくくとく上  
手ふうりとくねえうくとくを復せひとくやひと  
制の絹といふとくをほくあくにうてあく  
あくにうとくとくとくとくとくとくとくとくとく

なりとてかくもくらへるをかくしまへり  
ゆゑどつゝゆゑと祖先の壁のゆゑとすくへま  
くるれどりと従つてゆゑれどと天性にま  
やうまんくにはりこりとくのくらゆゑと自の  
ちひめきとゆゑとれと人の貴ふらゆゑとくを  
ゆりゆかりいふとあまうゆふあまゆふとれ  
とへと事う教令をとのとくに自他毛を吹て取  
しやまきねとゆゑが思ふるをとくふくへりあ  
らぬゆゑとゆゑとく紫をひぬくはくくはく紫  
あくとく紫乃ゆゑとあくとく紫乃と

行ひ取ふどとてもやがの御教不如何を思ひ  
平向とすりに引くんすくよア行うあまう情を  
うとし御もとりとくいからうと御もとても多  
うと作もきらがへあらうとれとつうも  
平懷也とくわうてれもヤレシとあまうふを  
うるねうたとも有難よりもととへまつされ  
とを強ほきうのうもおもよゆゆゆゆゆゆ  
うり平懷もととくもとくや制ノ御を一はんこれ  
さかうぬうともにも御そくうまくへわくも  
ほくまうの面もく作もわらうもととあす

トモセタニヤハシマリ

皆の國に毛もくもん駄乃三事一などと  
善事多々くま乃ちもととて  
駄乃からみつ後うきはあまがよて  
いませまくみゆきよ種りまほう  
あえさやじきのうもんより月奈  
かけわらう那翁あれ重乃そ  
重ね重ね西へとこうう故の心乃  
うふもいとせゆき

さくいやす乃事繁よけをもくもく  
まくらへおねぐりひとと  
散歩するがまむじひのわきみらへ  
あや古乃くらゑれまうさう那  
歎やうせんかうりよきくあとすれ  
そめじつまき我てくわあね  
タキチカテシテスル故里火の  
一矢うそそそそあわりれ  
玄済白のとくめのうをきをば  
えわせかあくくくヨリ花ぬふ

キラキラるるれどもくしてまくられ  
ひくらくらくとすまねくまくら  
あるひまくまく月乃日浅づくと  
あつまくまく風ぬくもくらふ  
夜の面れ草緋のようかくにしき  
ととのううらうふらこゑれ花  
大くらや圓井のひうれうまほくら  
ねちくくくとをあらきりあざそ  
ふくい乃まくら竹をねぢ變不  
ゆかうからむまくらひくく

よもよほよかせよまひを  
呼くきくきふタあらのを  
むくね門あめふくらうを  
人もさうこぬたくまきと  
タク終をもつめやのゆくら  
いよまうをたまふふれ  
拂はもあめうめらをくを  
すく、う生の玉くは  
はくひのましねもくに若  
よみだりやがおもてにまう

花の多をわらわせてそばあさね  
いさくやうわくわくわく  
極く升る山角あゆうへこれ  
肩歯せぢひきうりまう  
まくくひまくねりれ御乃めう  
うほくらをつまぬ身をさき  
春まくをとくと序墨の  
ねくうをまくわくまくう  
みきてわすれうをくまとくらう  
まくくわくわくタノムか

なはてのむらをアミタのまへて  
この世ゑはゆき風をもとし  
御水をもとのうぢまよ國へまく  
あわせやめり、 えのまく  
タモれはひもくほのまくまく  
森ふくまく風をもとし  
ゆまちのまくれを森をやくまく  
ゆりとふ葉をうきまく  
そくめまくすこのゆの蓮を  
こくめまくしておまく

みまくさるひのうまくさくくに  
さくまきあ夏まゆはひくまく  
まくとわ面のまくまくまく  
そろめきき松輝のま  
さまくむ山下のまくまく  
う勢ようゆまくまくまく  
ゆくまくねのうれ吹は風  
まくまくは吹をまくまく  
まくまくの椎乃まくまく  
耳まくまくれをゆくまく

さうすりあふまきをひら乃下落と  
けにさそ蟬はてかくゆとりぬ  
音を絶えとへとくかえてのあすりま  
まきにれひづるへうそくらめ行  
もののかはりやとろ門をくえ  
こみちかくぬぬぬめりえま  
あつうせをねのあくよろもあまきて  
れをうよふすみ乃にれいす  
流すくふ川原柳葉まみどり  
そくそくまくねむれをよ夕風

ものあく月をあらはば思すん  
うをひれれまやのあまうよ  
あつうきまくせよあまふゑまの  
めりもくとも生むせひうり  
うもあまねむくと下にくわせても  
金れにこひそれをかくれを  
神ふのまくわひとくまうけ  
くよみあまよかくしほふれ  
うもくも早田のまくはまくうり  
くまよてうをよしれひまとせ

とまきのとくをうへとくの歌ひ人ノよ  
名のひむほとく下きらわふ  
歌乃事れとほのりのそよぎよ  
そよびく風吹もそゆはうふ  
まよひとほよねもくすを略去  
いふをまわ人乃て絶を  
あよひよ鷺乃めり羽シくまつん  
を升もけよ云シくまつん  
たけぬ人ハあみほくまつん  
あく絶乃とまをひすじま

とまきのとくを小書き公無れまよ  
吹う絶シくをあよひタウ勢  
かきくしにまよひよが轟ハ那  
海シくとくへ風ハたうひて  
那波シく縦シくをひき音の轟ハ  
う絶シくを立シくを立シく成シく  
うちと蘆シくをうわふらうう  
略シくよせ絶シくをそよ  
うとひよあひよくわきて  
けのこくよなれふうと

岩の邊に立木と燒き石  
をあきらめてもあくさか人  
が立ても我は行ひて立ても  
我をかじつぬ人を立ても  
あらゆるぬ事を立候まし風流に  
とあいかゞ姫一物を立すわくへ  
葉立けも神立すやきやし川乃  
石立すもともいさ川奈より  
神奈乃立りねれ等

あはやほふ立すとゆぬへこすと出立す

て立す作

立くやつ立くや  
立くりと立くみ  
立くゆくと立くを  
立くたよと立く  
立くよくやくを  
立く一やくを  
立く立く立く  
立く立く立く立く  
立く立く立く立く  
立く立く立く立く

うちつまつみを うちむれと云  
うちもどり 消アキハラをとやとくとく  
ぬふと うちうちつとく  
まもねるとを あなてととく  
つむゆめりと 姉うりゆめとくとく  
むめりと くわくと  
人ぬきば 人のくまとひ  
人のうみせぬと 人じまとぬと云  
うづくまを やまとことひ

## まみみを

うちくらば

春のまこと

多モヤモアヌ

まみみとく  
うちくらば

春のまこと

多モヤモアヌ

うちくらば入行教とくく称け教を立くとく  
うくらば入行教とくく称け教を立くとく  
に今素を捕りて船中他へかやへ寂もくとく  
るまくゆく乃はうきとくくとくくとくく  
船行う船をえりへと十首小七八そはおまめ約  
をあらすとくへ用ひうとくいふかやうのやまう

久もあつてくとどもんすひを祠ともや  
をとやうんせれし西行上人候新朝臣の綠  
焉をやどへも和らぐよまれをもとわりそ致  
乃もいきうきくへはくとの祠焉をぬともよみ  
く修やとうひよくも室家での作られ又中古  
の和うの神めくめりよく代西行は節と  
ふ人もあるじるを無一からむとぞれくに  
といふときは風神えつまとうあらそひをらひ  
修よぶ後代のくもの人の生懐のほじかにち  
く詠うづつうをと向むまくやめらむとも

就中此阿彌ノ神もさうと云ふのをばやんそれと  
されど世より申してあれば一神もさてはますま  
とひえひりんより十神とくらみをひいてもそぞ  
られぬまゝのうちかうらむとて一向ひまへらるべ  
をよそくちしるきやうんづかくある世であ  
ひの風神を正向の脇わざとひねを一の様も  
ニ極義及びあらうううひきほすくもくらよ  
へうへ詮よけふれうくめへも教養の法をそひ  
せきゆーじ一神よとくまつてひぬを一の様もく  
考も考もとと色師乃風神よおみにを文乃やうよ

をすばしくそれと並んで同一のことを重ねて  
如くいつまでも其人のえりもとめがゆく所  
をもとあらわすいふにあらず也。申頓阿う事籍を  
かよ申嘗のうち欲乞をいたる小僧といふも  
又餘の一旅寺をまるゝとぞりとひしゆゑア同  
門来まく始くはア津井兼好を運びハ船行  
きをあきけんとくうや修つさるが傳あり五度波  
ちかく源一もた。一旅寺の不倒し頓阿一人長  
生すくひかよ結集をとくくらうんをまき

一六六六人乃亨子之後上代之國祚に了うひをとむ  
かくからうくやうく中古以來基後倭乾姫川院  
百人連をは又爲倭和尚倭姫以西乃上人は氣難敷  
完事に寐蓮をもつてまちづき密因さわる  
一無乃かうこそぞれぐくよまめ易居そし色もつする  
かみへそまくともまひらうをキチ子細やひへまし  
ねりとくに付乃亨子へとまそれ故に向く御ひ  
まくじよへ被せ詠はまく作まくても強ま眠ま  
せの亨子と傳く日ニヤマタタヒミナタタヒミ  
毛多モカヤマタヒミナタタヒミナタタヒミ

又生るにこもくちみをきてしもんじう作もと  
のれりよそによえらへしもくゆゑ耳ふきよく  
作は年もあゑのくれく候まきひきみのれりよく  
歌をかえりけむとまつりきり是ひひくらぶく  
とく候りへりあひかくらふす生をまよやト入  
とくは汝よ一もくやにくぬ好忠う事うゑを無  
そくううむこと候もせきき舞乃ねりくも  
作やお谷敷のほきよば御子た家のんやを  
あへまつへく勤さててとくともとけきさね  
焉とくらきやしもとや大うれしむ勤

アモ我そとやまくふらむせしもん  
長もく舞也一候もくとくとまな事もくらむく  
は清浦とくア平もととけたくもいくもくもくも  
闕路とくとくもあらつさんやてもくとく時  
他門とくは仰古家ひちうき風をとくやまくま  
まれてとくとくと問答付もんよしは猪もまく  
一やとくわせらまき風の候よし清門來よめ  
よも候おうと終末をくやまと考ひとまやうに口  
にまくちまく真へやしもととあまくは清子た方  
の事ハ友林の拂加護もくねくとれく絶絶ぬ

まほくもりくをアセムノミシテヒム立  
不立一役者も活きるやうのせうとのまくやと  
ウト比算よ五

一水野法華院より金よ信貞は宝よし毎度清高とすけ  
よ清判は云句御存ひ松原五判のう清判はあ社の  
法華院といふ在い是にむらく我おーと紀う三すも勝て  
字はくもヤレモソノ後もしく在てそのつゝ心  
度けくと領納仕くと始終もあくたうへされ不  
審のあよあれをよまかうとくと承て此業修て同  
答うくア入てあくもあくと

一師當道のまきのまへ一玉下の西鏡とく徳人寧アシ  
アハモク小は卑下あるまくとくばよく徳身の譽  
も丁目がくあ辱乃は時をあまりよし入日小は處する  
清出世と重く又ハ初手小立いとせ徳とくまく  
不見よ壁とくらく古用口と伝元不と他門乃口起  
ちゆくとくわづの一圓小額アシく行はずもは數  
取不く修て名とがくやうとせ徳とくまく  
まくひくとく我道ハあ神のほくとくひよくとくとく  
身とくとくて方俊とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

やうやくやうよほりをもひやううおほきつて身かい  
る世はわくと人のうすすねうねうねうねう  
みうのうとありとりて身やうれて身繩  
あ通済者と人よみせうみせうみせうみせう  
節とおれぬうをほめうめうめうめうめうめう  
あくまくほくほくほくほくほくほくほくほくほく  
あくまくほくほくほくほくほくほくほくほくほく

くとやうれ起をきりゆく

もくれくも人のあくあくあくいもく

かくじむきあひのほう

とくまくおもひてひまうとくおへそのかひの年春

乃節令ふけ因不くあるゑ御身引ぬうまとけう  
せうまく三まうう和ううと作うううれもひまうう  
ああだうやうふくとやううと神をひくひく  
されどもうううとひちうれかくらう

神をひくもねうあくほう

ト強うまくひくとやうまくあくよやううま  
をほる<sup>あく</sup>世に家を強にくうくらきいてもの  
彼の身をよきがおほひくらきうれどもあくとや  
りううの強うれひくらきうれどもあくとや  
きくらきうれどもあくとやとけめらくある明

御事多<sup>シ</sup>て不快の後古今集を清瀧中<sup>シ</sup>らまく徳方にて  
て文多<sup>シ</sup>て今後も書<sup>シ</sup>むけ後も載<sup>ス</sup>そ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>かく  
きくと<sup>ヘ</sup>おも<sup>シ</sup>り經<sup>レ</sup>りひをあさり取<sup>リ</sup>やうよんや  
我<sup>ア</sup>もおも<sup>シ</sup>りうそ<sup>シ</sup>をゆく<sup>シ</sup>は紙<sup>シ</sup>もあくを  
もじゆうもりらひ三<sup>ミ</sup>まうめうやうひのあは新指<sup>シ</sup>  
きを傳<sup>シ</sup>撰<sup>シ</sup>ひづくともうともうやうもうかく一<sup>ヒ</sup>は  
て固<sup>ク</sup>かく<sup>シ</sup>るを<sup>シ</sup>て筆<sup>シ</sup>葉<sup>シ</sup>の葉<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>作<sup>シ</sup>うせられ  
しもくひあく<sup>シ</sup>くま<sup>シ</sup>く

首藤谷風うきは代子集とくよ四季の五種六首  
をあくへひそめえりおじらまくお春／除雪

あくまでも、いまと又元源氏の巻二を人よどみされ  
もそ乃やう成書つゝて、言ふ事乃はすうりひくり  
こゑもたらし、物をこもるかからねば、もんじゆ  
乃まうとうとひだりをひがけ、落おちく、あまうむと  
うえの事などもへりまくとうやか様のゆき  
はれまほきありまく、おもむくとよひ

アラシノトコロノハタケノアリモテアラシ  
アラシノトコロノハタケノアリモテアラシ

の事はもとより御所を嘗ておもひて間違ふ  
事あるまいとおもひたがまことにそれをわざうの秘中  
の事あるまいとおもひたがまに作らばれとおもひてまよ  
ふくともかほとしむらじゆふや終りすむかとおもひてまよ  
宝庫の内物と御本と廻事の脚とすと落しむるを  
更に三事とぞを一を残すとまよひ  
まよひがるを約はへてとくやあらひ佛法も教外  
別情もゆゑぬとくにうらやまんおがつうくい等  
事もまよひふれを文才のくわくねやくくら  
多様な事もはばほの事とて通じゆるべからず

て今日の御詫びは浪色は同心いもん直切を西  
ひよしもいとくにさんをもるの

卷之三

一山草子和琴所進墨一帖案也何用捨て合点と和  
紙をこし斗ひ左人まのまくよかへと口絃め  
きく枝葉くさくくくくくはくめくらむこゆくく  
うれ翁の心じあ御つきてふをそのきくらうと  
えのりくへもんせ古巣をも乃くへと翁は古  
希と仰ともどりとしゆくもとおきを云のまく  
よ我翁をもどるべからんとくに寄りりりを嘆く

あり又風草木雪月花鳥あらゆる種を極め  
きりせて三種を以てひあくへとあつははとま  
うもつとおもくがくを以て判せよ變かと連くとされ  
たはゆるふねくらきうちわ持くと我持すとて  
上手といふくへよんせきいつきのむじはれを心  
よりともあともみへじくいはとよきせでとせ  
らうれをふ乃はきりひづれに上手を極め左乃十  
せ年の方ふくとあつたうすくとくれくまう  
きそくせうれをひくもまく承とてにの功と入を  
らうせうり人の事の如くと我きり五六十年の間

仕く仰納と申をあらへて御を有之事  
集めたり。彼はる被り。御を一首もひの  
一だらかあるひにかく。中井は入る御り令  
ふ十七よとひて。もう終り。御をけまく。上を  
み。指見せ。御をあへ。而それも。一。御  
持。御を只。第一。よむ。のと。御を面見。えと  
せれ。この人の。う。壁。一。御も。それ。御を。かく  
まつまつ。と。さり。十六。歳。乃。時。と。御。や  
不。と。儀。乃。御。を。かく。御。よ。人。を。御。す。と。御。と  
處。ら。か。か。し。と。り。御。を。四。五。の。御。と。御。

さる。風雅集。う。名。所。と。かく。御。と。御。と。き  
か。こと。と。ま。と。御。と。り

一。古。事。と。入。る。す。へ。御。被。と。か。く。御。と。う。一。只。上。年  
と。の。五。う。仙。乃。被。へ。う。り。を。ア。ラ。ト。と。て。附。役。お。と。一。御  
西。約。上。人。へ。古。今。集。の。五。う。仙。と。か。く。御。と。う。と  
か。う。を。ら。き。ぬ。歌。と。あ。ゆ。と。か。う。と。あり。ぬ  
只。こ。ち。か。上。の。五。う。仙。と。御。

一。歌。と。お。舞。と。く。人の。う。う。う。と。へ。つ。う。と。お。う。と  
ぬ。う。う。歌。と。ま。一。五。う。歌。う。人。ハ。世。く。せ。と。上。を。う。  
を。而。半。あ。る。う。う。歌。と。生。實。事。も。か。を。と。て。ゆ。

通財冷泉入る事の三うさうぬあくと風  
情とくのを珍ふめり嚴可也えはると世人の方ア  
をうへうありミ神やモリ紀伊古傳など徳裕  
するもヤモシ是を三う紀乃御世俗統と云約  
ホトノガモシモトマニをねたるノヤシ一カクス  
トモく古事記の語を言のこすとまんを我ニテシテ  
トヨハモナリ紀中絶句角を刻ム云書を西多  
生キ和音而よりねト仰ムアヤ紀西行と曰  
世俗行とよ中國とてもとを我ニモルモ給ルム  
ヌアサケモ世俗の言語りとモ体面せらり有ル

シテ御さんとモ万葉集の中に耳とくとく仰伏シテ  
不うち無くそ宣承ひとをよいす一也珍ふ名  
一トモトくに得ヘミモトヘニハシ承ヘモう猶未云期  
ヌヤモアレモ書まれ候ヘリトヨウタヘヨモセツフ法  
長る写テ年々と墨は教説を本様ヘアリテシテ  
一教説とくよこ様候ヘリマテやとあつる愚毛のん  
ひとのふもトウモロコシとあつる愚毛のん  
それをほゞ進ヒセ安く近ナリとく作意せり  
八雲抄詞序の内

和詩用意ゑく

可詠歌事結額乃詞字あらばもあらはをめく  
し物を事と見るをくふとおもむくも尋花の部  
公私との事よほまひ歌くとたつのゆとりの音と  
し無むれに歌とくとひもあらくさうねあらうち  
ユキの至りあへりとせんちかくとひくん詠  
乃字ひく可詠准教故得門

遠山雪

風けくふをくとよよそくねまく  
ゆきのふわくのまくらゆく

風神雖不致產奔遠字依舊存載之

同類を真觀房清心教

まくねまくあくうけしんゆらぎよ  
れうせきゆとのありはくもくと  
ま字やくらぬへえ意難ふうをひそひそん  
翁子をもせすてあを又巻上の方の字あきれ  
邊のみ野外の外を字巻中の中れまゆせ  
字きうちれ移をまたり個野徑の種の字山踏の  
踏のまへともよふかがふうゆるよりありわあち  
くじくわり

野徑月

後赤核

極くも集まつてもひとつのもうやう

葉のくらうじういづか月くす

同一影を

家家跡

むうくむくも集らくうらにくら  
こくしそえくふくらくく月

山路元

故禪門

みゆくも集まつてのやくうつまれ  
くをそあくああがくひく人

徑字路よ心可心得矣

卷之三

二

乃羅と種々のものへとひへりやくを心よりと考へ  
猶豫のこゝさへされど内里も秀逸うるく集まへて  
詮も寺舎に廻まゝわづへ野よめふくらむ者へや  
行ひまゆり

一早朝とちかすとあくへの拂をせん右紙の詞をよ  
下あくをいあくまじ留牛が拂あり幸ひまくみ  
をもつまくひのく風情をめぐらしきとてあ  
露一記すかせとむとを尋の詞をとどあくまじう  
神といふる故辨門蕭熟を

梅雨潭之水何其碧也

くあくまうれゑやまくねまくれ  
お哥ハ

ゆふくれのゆくさやまくねまく  
まふきあまくとむくりやまく

御差骨

御むろたうよきやまくねまく  
ああぬふ月夜かくまくねまく

奉歌を

夏乃くはまくにひまくねま  
まれいはまくに月やまくねん

夕立

いづく川あぬくまくねまく  
まくまくまくまくまくまくまく

お哥さ

みゆといでくまくねまくねまく川  
ほう縫そじまくまくまくまくまく

實絃

あうまく川ほくまくまくまくまく  
だむひやあそやいはくねまく

お歌

人まことにあらうとあらうとの  
まらうお経とお経とあるに

只今え悟るにあらうとほく地獄の火の獄を  
そはくつて次をくむたびにまよひまよひされ  
は故禪門例のあらうれ強盗のいもじれが  
來と剣口すれどもれとくとくと觀音堂を  
まよひぬわいひそりようくひとの  
かく称をくわくすくわくほくふうれ

お詠え  
とくとくはくとくとく月の

まことのまことのまことのまことのまことの

郭云

ほくまとうけのまとうけのまとうけの  
まくちほくちほくちほくちほくちほくち

お詠え

人まことのまことのまことのまことのまこと  
まくちほくちほくちほくちほくちほくち

お詠え

人まことのまことのまことのまことのまこと  
まくちほくちほくちほくちほくちほくち

見ゆる人をなまかすとひこくらむ  
わう乃ぢりたんむらうそゆくま

葛蒲を

ほくくとくあまごひ弱とあやめ草  
せりうそもとぬれゆく一のみ

車歎き

小車のけまのひまをとまらまく  
あまくさみゆと耶ゆく一のみ

麻を

あきの野の毛と風よ浦一里ちく庵の  
つゆうやけまはるひまくさん  
車舟

秋来せれかくにまへ利きく花乃  
ひうそやうひんひよーとま

葛蒲

中書

花をとまむやう野をふくらむ  
ゆくとゆうふあさうむせよく

車舟

うくまく車舟はくまんむらうそく

さあとゆうふぬくといひゆうと  
古事記をとうか神はく可波支合故縦ひをもとあ  
あらためてうそこもとてそ是をゆうと三をあ  
きわと乃くにつまん半をせんゆうと三をあ  
からともれあどまんそをせんゆうと三をあ  
一首絶えゆくわざともねまよかのれを空を  
詠ふもあゆくへうそとユ古歌よ宿管ちうがゆ  
るす有とゆふよとひひふうとくみをや  
いへふをきり古事記

あらあらんくよみをやはのゆの

さにとあらり農ちうむりあまの  
是を看く

放釋り

かまくとゆく羅波のまかタくふを  
あらあまゆと身をかりゆ  
んあらん人といつてはるそく我心あれをと贈答  
せまきをうまきは教者を又森の猿竹と肩を  
茅木かくしをやまうめとましも  
ましの林乃うてまきはそももく

車寄

あらうかあまのまのうりうれ

和刻用義

七

じめやうう物とあつて、  
いつともかゝる人のやうさとま  
まのもとを冬納まき

人色草もひまぬ  
くらへ皆故同心羽衣詩立勝不<sub>レ</sub>勝<sub>リ</sub>也

卷之三

人を了そきうるわあめくらむと  
ゆゑあまもんあま乃よ月

卷之三

月夜うへてゐる人まゝあがめくわ  
あえじゆくじよひくしゆ  
のとく財をばんりん  
石林室多ほほのそらかく

お取次ふを頃より神を又ひまくらへとて  
さうのうちに身を捨てた様あるべくもあらず

初又之多小手の如く等のものもあつてゐるが、これは  
ゆゑなりは流よハ肝氣を獨立文字なるべしと云ふ

探影をもじとてもみみとのうそはの書  
す人のあるにとくぬくぬくへきおほまうてほ  
付きくばあくかく小みゆふすゆり又文  
字も因鼻もとと與りしきへあうこくとにかく  
もぐり又えもーをとくぬとく胸のる人よ  
みあまた事あり神不まく神也云くも神を代  
あらむもじへ候も又古名旁の立文もとをく  
つまも根深のとく耳よりありそれの表根  
中納言入道も様らう身やあらねるとひもへり  
らととヤシル候きり又文まの終やとい等

乃神毛御有子細感の名前感の神祇をくふも  
み細つひめへさんとくとく感字也無用よどく  
くこととせ

上句の語をほくへ力と入つまく下句がくまく  
もくにく連続と呼とのかられすけいもくせ  
連詩を一句小んばつひもくたうにほくを求む  
ほくふくもく連続焉してこくくさくあくま  
けいそれきり上句をかくわくあくわくを下句よ  
程するもくじくうせ下句よくふくくもく秀  
邊の神よあくもと已上略件

文獻註之

前亞相在判

和詩祕密相承卷之

和歌之式家々口傳體膚不遑故  
舉焉是以世人徒知其名而未見  
其書者亦夥矣今此集純存十  
於千百安得盡諸家之秘蘊也若  
非具眼者不能辨其真與偽也然  
學者玩其文遡其時以推明之則  
真偽不待辨訖而自得焉語句

之宣複文字之謬誤。一從舊本而已。是吾之所不加一私于其間也。名和詩古語深秘。抄壽于梓云。

元祿十五年孟春日

東京

出雲寺和泉錄開板

江戸同人抄

同店

之宣複文字之謬誤。一従舊本而  
已是吾之所不加一私于其間也。  
司名和詩古語深秘抄于壽<sub>スル</sub>梓云

元祿十五年孟春日

東京

出雲寺和泉錄開板

望月山移西町

同店



